

風の末裔シリーズ・5th シーズンの10

～市場にて・NEXT～



©西風そら

<http://nisikaze.sakura.ne.jp>

波模様様の砂の上、大海原の笹舟のごとく二騎の馬が行く。

「ねえ、まだ？　ねえ、後、どの位？　ダンナ様あ」

後ろからひっきりなしに喋り掛けるのは、キノコのようなバージュ頭の、しモン色の瞳の娘。出発してからずっと落ち着きなく、馬の上でジタバタはしゃいでいる。

「ダンナ様はよせて言ってるだろ！」

前で振り返るのは、漆黒のハトウン。お馴染みの黒衣の馬をゆっくりに進める。

「お前は一応、親父の養女になったんだ。お兄様とか兄貴って呼べや」

「オニーサマトカアニキ……長くて覚えられない」

「……」

暫く歩くと、地平に白い大きな街が見えて来た。様々な商隊が賑やかに出入りしている。月に一度の市が立っているのだ。

「わ……」

カーリは、しモン色の瞳の下の丸い頬を紅潮させた。

色とりどりの布と色彩の洪水、甘い匂いの焼き菓子、珍しい動物、大道芸。全て静止したモノトーンの清宮せいみやで育った娘には、現実とは思えない目まぐるしさだ。

「面白いかな？」

市は月に一度は立つし、ハトウンには見馴れている。

「うん！　凄い！　ね、ダンナ様、そつりよ……父上様が、欲しいモンがあったら買って買えって言っていた！」

「ああ、ただし、あのインドの怪物以外な」

ハトウンは、カーリが目をキラキラさせて凝視している鼻の長い巨大動物から目をそらして言った。

「う、う……」

カーリは名残惜しそつりに、長い鼻を見つめて通り過ぎた。

「今日はシドとエノシラの結婚祝いを選びに来たんだ。お前はオマケ。俺一人でもよかったんだ」

「……」

後ろから返事がない。振り返ると、キノコ娘は馬上でグラグラ揺れていた。

「お、おーい、どうした？」

「は……あ……何だか、チカチカして……」

「おいおい？」

ハトウンは素早く下馬して、カーリを助け下ろし、広場の花壇の縁に腰掛けさせた。娘はさっきまでの元気は何処へやら、みるみる真っ青になって行った。

「まったく…、はしゃぎ過ぎるからだ。馬に乗るのも初めての癖に」

「……………」

カーリは往き来するヒトヒトの足の動きにすら酔っている感じで、ぐったりしている。

「馬を預けて休める所を確保して来る。ここで待ってる。動くんじゃないぞ」

ハトウンは二頭の馬を引いて人混みへ消えた。

カーリは大人しくチンマリ座ってハトウンを見送った。

ひな壇になった大きな花壇には、砂漠の肉茎植物の花が力フルに植えられ、それを眺めていると少しは気分が治って来た。

「ダンナ様、優しくなった…」

ルウシエルの言った通りだった。

ダンナ様と話す時間を沢山持って、清宮の毎日を沢山喋った。

もともと、清宮の事以外、話す事もないのだが。

そしたら、最初は半分腰を浮かしていたダンナ様が、だんだん長い時間を聞いてくれるようになった。声を掛けると立ち止まって待ってくれるようにもなった。

その優しさが憐れみで、このヒトの妻になれる可能性が薄いのはもう分かっている。ただ、自分の今までの人生ですっと思

っていたヒトが、自分の存在を認めてくれて、側にいてくれるのが、単純に嬉しかった。

ハトウンは木賃宿の部屋を取って、馬を預けて広場に取って返していた。ふと、屋台の細工屋に、カーリの瞳と同じ色の櫛を見付けた。

「買ってやるかな、しかし…」

下手に身に付ける物なんかなくてやって、また変に期待させても可哀想だ。自分は、あの娘に、憐憫しか抱いていない。

同じ年のルウガが、蒼の里へ留学し、様々な出逢いを得て豊かな人生を送っている間、灰色の修道院で気の遠くなる無機な時間を重ねていたのだ。

カーリの話す清宮の日常は、刺激も何も無い退屈な物だった。退屈な話を延々聞いてやる事が、この娘の存在すら知ってやらなかった自分の罪滅ぼしのような気がした。

「これから、ちょっとでも埋め合わせてやらなきゃな」

その内、自分の息子達の気のいい奴を選んで、然さざり気なく紹介してやろう。歳の近い連中と遊んで、つるんで馬鹿やっただい喧嘩したりして、それから健康な恋愛をして欲しい。

「……俺、父親みたいじゃん…」

ハトウンは苦笑いして肩を竦め、小さな櫛を買い求めた。

「あれ…?」

花壇の縁に腰掛けていたカーリは、覚えのある匂いに気付いた。甘くて香ばしい、生姜の混じった香り。

立ち上がった吸い寄せられるようにそちらへ歩いた。異国風の屋台に、覚えのある豆板が並んでいる。

「これだ！ これ！」

ルウシエルと初めて会った夜に買った豆菓子。あの時、ルウシエルの分も全部食べちゃって、恨まれたっけ。

「よかった、これをあげたら、ルウシエル、きっと笑う」

カーリは豆板を一つ取って、店主を見た。

「これ、頂いてもよろしいか？」

「ああ、まいど！ お嬢ちゃん」

「有り難うございます」

キノ「娘はベコリとお辞儀して、そのまま立ち去ろうとした。

「お、おーい、お嬢ちゃん、代金！」

店主は慌ててグルリと回って、カーリを追い掛けた。

「はーい」

「はい、じゃねえ！ 金、お金、銅貨！」

「……神の恵みの命の糧に、お金があるのか？」

キョトンとするキノ「娘の手首を、店主は掴んで吊り上げた。

「ぶざけた小娘だ！ 盗人がどうなるか教えてやる！」

「ビッ・・・！」

ダンナ様以外の男性に触れられる事など人生にあると思っていないカーリは、恐怖で固まった。

「まあ、ちょっと待って」

店主の肩を、後ろから誰かが掴んだ。店主はビックリしたが、カーリはもっとビックリ仰天した。

「真っ白いヒト！ 髪も肌も真っ白！」

經典の絵姿で見た聖天使…?! 娘は吊り上げられた恐怖も忘れて、その少年をマジマジと見た。

「まあまあ…、そのコ、泥棒する気はなかったみたいじゃん。

ピンボケなだけでしょ」

「どうだか！ 最近は堂々とした食い逃げが流行ってるっていうからな！」

「とにかく許してやってよ、僕が代金払うからな」

「坊っちゃん、この手の輩に甘くすると、後々よくはありませんぜ」

「うん、勿論、代金分は働いて返して貰うよ」

「ほお……」

店主はニヤニヤして、掴んでいた娘の手首を、代金と引き換

えに白い少年に渡した。

「豆板一枚とは、安い娘だ」

\*\*\*

取って返しただ広場の花壇にカーリがいなくて、周囲の目撃者に事の次第を聞いたハトウンは、顔色をなくした。

「豆菓子ひとつで、知らない男に着いて行っちゃって?!

「あの馬鹿! 世間知らず! オタンチン!!」

勝手知ったる市の中を、全力で駆け抜けた。

目立たない狭い路地に飛び込んで、何回か曲がると、すれ違う商人達の風体が変わって来た。最後の通路を抜けると、一段下がった湿っぽい商店街があった。

表の市場とは明らかに客層が違つ。一つ一つの店がテントで覆われ、ランタンの灯りが妖しく漏れる。

目の下に大きな隈を作った男が、骨と皮だけの腕を上げた。

「よお、ハトウン! 久し振りだな。高地産の葉っぱのイイのが手に入ったぞ、どうだ?」

「またにする。奴隷商の元締めは何処にいる?」

「蜜蜂館のマダムん所。今は取り込み中だと思つて。とした?」

「捜しビトだ」

「オンナか? 止めとけ、オンナは厄介の原材料だ」

「充分分かってる」

ハトウンは薄暗い商店の間を、ヒトにぶつかった数だけの怒号を浴びながら駆け抜けた。

市場は表は健全だが、ちゃんと暗黙のアンダーグラウンドがある。ヒトが集まれば必要悪つてのが湧く。だけれど、やっとお陽様の下に出られた修道女には、無縁であるべき場所だ。

「レモン色の瞳の娘を知らないか?!

「よっ、砂の民の坊っちゃん。女の子をお探しなら、目の色七色取り揃えますぜ」

「俺は今、史上最高に苛ついてんだ! 聞かれた事にだけ答えろ!!」

そんな会話を何十回も繰り返し、殴られそうになったり、殴られたり、殴ったり……。

半日大立ち回りして、ボロボロになって……カーリは見付からなかった。

「こうなったら、門で張って、部落を出る奴隷商をシラミ潰しに調べてやる。畜生、カーリ! 絶対見付けてやるからな!!」

ブツブツ言いながら街の入り口に向けて走るハトウンの目の端で、チョコレート色のソバージュがフワッと揺れた。

「…!!?…」

そこは元の広場だった。花壇の周りに人垣が出来、中央の高くなっている所に、妙な形の人影がある。

カーリが両手を広げて爪先立ち、しなやかな柳の枝のように踊っているのだ。片足を後ろに上げて上体をそらすと頭が踵まで屈き、見事な曲線を描く。群衆はカーリの舞いに見惚れて集まっていたのだ。

「ダンナ様！」

舞姫はハトゥンを見付けて、花壇を飛び降りて駆けて来た。

人垣は舞踏が終了したと見て、拍手と賛美の声を送った。

「ダンナ様、いた！」

「カーリ……」

ハトゥンは空気の抜けた風船のように脱力した。

「いなかったのはお前だろ！ さっき！」

「あっ、ちょっとだけ離れました。あれを運ぶの、手伝ったのです」

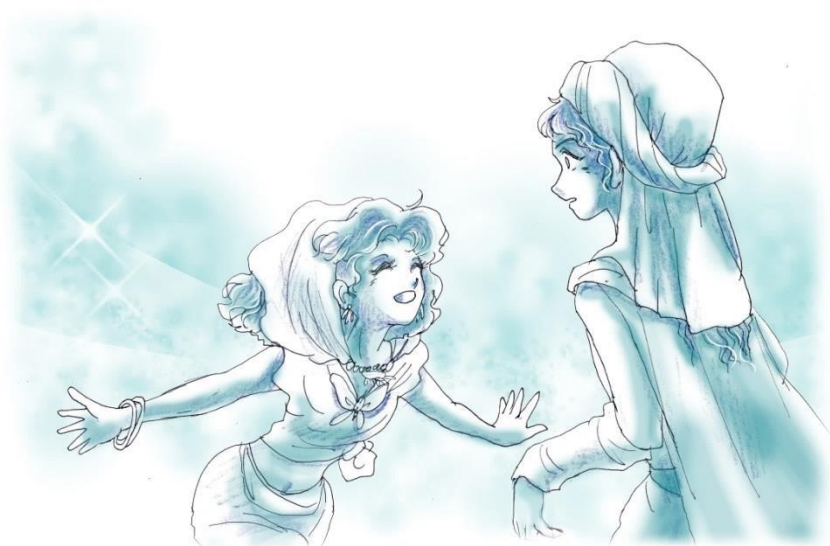
「……」

カーリの指差す花壇の真ん中に、もう一人誰か立っている。

違う……よく見ると作り物だ。花に囲まれて微笑む、羽根のある少女の像。

「……………」

「彫刻家さんに豆菓子を買って、モデルになってくれて頼ま



れました。「ここを離れられないって言つと、ではここで制作しましょって。それで、作りかけの天使さんを運びの、手伝つたのだよ」

「……………」

さっきの菓子屋の店主が、にこやかな顔で話し掛けて来た。

「見事なモンだったぞ。あの白い兄ちゃん、ここで粘土を練つて、あつと言つ間に作り上げちまつた。いいねえ、本物の天使さんが降りて来たみたいだ」

「やっぱり実物の女の子を見ながらだと上手く作れるって、喜んで買った。ダンナ様、わらわは良い事をしたか?」

「……………」

「…………いけなかったか…?」

「…………いや…」

ハトウンは肩を下ろして、カーリの頭に手を置いた。

「なかなかイケてる天使だ。作者は何処にいる?」

「行っちゃったよ、もう」

「作品を置いて?」

「うん、旅して、行く先々に天使を作って置いて来るんだって」

「何の為に?」

「何の為に…?」

カーリは左右をキョロキョロ見てから、不思議そうにハトウンを見た。ハトウンもつられて周囲を見回した。

天使像を眺める人々の、穏やかな顔・顔・顔……

「……………」

「ダンナ様…?」

「ああ…」

「怖い顔…、やっぱり、わらわ、いけなかった?」

「いや、カーリ」

ハトウンは再びカーリの頭に手を置いた。

「俺が早合点し過ぎだったんだ。世の中、まだまだ捨てたもんじゃないよな」

ハトウンも、改めて、花の中の天使を見た。

純真無垢で、しかし芯の通った豊かな微笑み…、確かにカーリだが、自分には感じ取れなかったカーリだ。

「ダンナ様、踊ったらお腹空いた」

「ああ、…お前、柔らかいんだな。大した舞踏だった」

「清宮でいつも踊ってた。神サマに奉納する舞踏。天使さんにも奉納してた」

「へえ…」

ハトウンは自分の考え違いにふと気付いた。

ハトウンは自分の考え違いにふと気付いた。

清宮での日々の積み重ね、それはそんなに無機な物でもなかったんじゃないか？ カーリの中身は自分が思う程空っぽではないのだ。外からだけで全て知った気になっではないけない…。

「お腹空いたっては」

「あ、ああ…、遅くなっちゃったな。急いで買い物済ませて…  
あ、そうだ」

ハトウンはポケットを探った。昼間買った櫛はポケットの中で折れていた。まあ、あんなだけ暴れたらな…。

「どした？ ダンナ様？」

「いや、何でもない」

ハトウンは花壇に上がって、折れた櫛を天使の髪に刺してやった。キノコ頭には、いつか、貰うべき相手から貰えばいい。

「よっしゃ、まずは腹ごしらえだ」

「ダンナ様、わらわは甘いお菓子がいい」

「お菓子は飯じゃない。後、ダンナ様はやめろ」

「はい、ダンナ様」

波目模様の砂漠に行く、夕暮れの二騎。

四白流星に乗るのは、赤っぽい黒髪にバンダナの少年。

黒砂糖色の栃栗毛には、白い髪白い肌の少年。

「今日の天使像、いつもと雰囲気違ったな」

「うん、今日はモデルしてくれた女の子がいた」

「へえ、珍しいな、フウヤがモデル使うなんて。よっぽど眼鏡に叶ったんだね」

「妙な親近感が湧いたただだよ。まあ、どうせもう会う事もないし」

「名前くらい聞いたときゃよかったのに」

「聞けるかよ…」

「そんなだから彼女の一人も出来ないんだよ。いい加減、シス君から脱却したら？」

「うるさいな。それよかヤン、見付けたのか？ 例の物」

「ああ、あったぞ、でっかい花火と爆竹。シドとエノシラ、僕らがいきなり結婚式に乱入したらびっくりするだろうな」

「僕達に雨の中正座させた癖に、結局よろしく収まったんだから、その位はさせて貰わないとね」

少年二人は結婚式で新郎新婦の度肝を抜くだろうが、思わぬ再会に魂を抜かれる羽目になるのを、白い少年は知る由もなかった。

くおしまい





